

教 仏 庵 草

第157号
(発行日)
2003年7月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimy3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
毎月22日午後2時
.....
- * 念仏座談会
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
- * 8月の同朋の会は休会

信心をいただく縁

X 「真宗の教えでは信心一つで救われるといわれ、随分聞法しているつもりなのですが、なかなか信心がいただけません。どうしたらいただけるのでしょうか」

D 「真宗の信心は、阿弥陀様から与えられる信心ですから、人間の側から何らかの方法を用いて信心をつかもうという、そういう意味での方法というのはありません」

X 「こうしたら信心をいただけるといような方法はないのですね」

D 「ええそうです。けれども、信心は阿弥陀様の恵みとしていただけるのですから、縁があれば弥陀の本願を一度聞かせていただくだけでめぐまれることもありえるのです。しかし、普通はなかなかそうはいきません。しかし、必ずいただけるかどうかは分かりませんが、よくよく念佛聞法させていただくことが信心に導かれる上で大切なことは間違いのないことです」

X 「信心に導かれる念佛聞法の上で大切なアドバイスはないでしょうか」

D 「聞法生活上のアドバイスはいくつかあります」

X 「どのようなことに気を付けていけばいいのでしょうか」

D 「まずは念佛聞法ということですから、やはりお念仏を申す生活をすることです。真宗はお念仏の教えだとは誰もがいますが、案外お念仏を日常生活で実行していないのです。お念仏は「行住坐臥・時処所縁を選ばず」といわれて、いつでもどこでも称えられるようにと、仏様が私どもに与えてくださるのです。ですからお内仏の前に座った時だけしか念佛を申さないというのでは阿弥陀様に申し訳ないことです」

X 「なぜお念仏申すことが大切なのですか」

D 「阿弥陀様はお念仏でもって一切の人を救おうとされるからです。聖人も

「我が弥陀は名をもつて物を接したまう。ここをもつて耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す。永く仏種となりて、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲証す」という元照律師のお言葉を主著の『教行信証』に引用されています」

X 「どういう意味ですか」

D 「「阿弥陀仏は名号をもつて衆生を摂め取られるのである。この名号を耳に聞き、口に称える

と、限らない尊い功德が入りこみ、長く成仏の因となって、たちまちはかり知れない長い間つくり続けてきた重い罪が除かれ、この上ない仏のさとりを得ることができるといいう意味です」

X 「阿弥陀仏の名というのは南無阿弥陀仏の名号ということですか」

D 「ええ、お医者さんが患者を治すのに、薬でもって治そうとする。そういうとき、患者はお医者さんの言葉だけをどれほど聞いて思案しても病気は治りません。お医者さんが与えてくれる薬を飲まなくては治りません。そのように、仏様の教えをただ頭で聞いて思案するだけでなく、南無阿弥陀仏の薬を飲まねばなりません。聖人もお手紙の中に

「阿弥陀仏のくすりをつねにこのみめす身となりておわしましおうてそうろう」と

「阿弥陀仏をもこのみもう(申しな)んとするひと」と書かれ、お念仏する人を阿弥陀仏の薬を好み申す人と仰せられていきます」

X 「阿弥陀仏の薬とは南無阿弥陀仏の名号ということですか」

その「くすりをつねにこのみめす身」というのは、つねに好んで飲む身ということ、常にお念仏を好んで申す人のことなのですか」

D 「そういう聖人のお言葉かどうかは分かりません。もう一つ申しま

すと、阿弥陀仏は南無阿弥陀仏となつて私たちにあおうとされています。そこで、名号とまでなられた阿弥陀様が南無阿弥陀仏です。ですからこの名を称える生活は知らず知らず阿弥陀仏と触れあっているのです」

X 「自分では分からなくてもお念仏していることは、阿弥陀仏と触れあっているのですか」

D 「ええそうです。お念仏には阿弥陀仏の智慧と慈悲の徳がこもっていますから、お念仏にいたしましたことは阿弥陀仏の智慧と慈悲がしらすしらす私の側に浸透してくるといえましょう。この意を聖人は

「定散自力の称名は果遂のちかいに帰してこそおしえざれども自然に真如の門に転入する」と

「自力の念仏は第二十願の果遂の誓いによって、教えなくても

《 盂蘭盆会法要 》

8月16日(土)
午後2時始まり

*なお、8月は22日の同朋の会と
第3土曜日の念佛座談会は休みます。

自然に第十八願の他力念佛に転入する」

と和讃されています」

X「阿弥陀仏の智慧と慈悲が念佛を称える私たちに自然に浸透して阿弥陀仏の広大な慈悲心については気がつかせてくださるのですね」

D「そういただいています」

*

X「聞法というと、ただ仏法に関するいろいろなお話を聞くことと思っ

ているのですが」
D「聞法の〈聞〉について聖人は

〈聞と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞き疑心あることなし。これを聞というなり〉

と仰せられて、聞法とはただ漠然と仏法に関するお話を聞くことではなく、仏様が本願をなぜ起こされたのかというわけと、その結果はどうなったのか、またそれと今の私自身の苦しみとはどういう関係があるのか、そういうことをよくよく聞くことが聞法の要なのです。この要をはずして聞くと長年聞いていても的はずれの聞法になりかねません。的がはずれているとなかなか信心が開かれてこないのです」

X「仏法を聴聞するには要を聞くことが大事なのです。その要とは阿弥陀仏の本願の起り」と結果、いわば本願のいわれを聞くことが大事だといわれるのですね」

D「そうなんです。その本願のいわれがとりもなおさず、現在称えているお念仏のお心です。称えつつ、称えられているお念仏の思し召し（本願）を何度も何度も聞くことが大切です」

X「私たちはいろいろな珍しい話や未知な話や変わった話やおもしろい話などに興味をもち、

ついついそういう話に関心がながれてしまいます」
D「聴聞はむしろ肝要な同じ話を何度も聞くことが大切なので

す。蓮如上人の八十通のお文様でも基本的に同じ内容の繰り返しです。また『蓮如上人御一代記聞書』には上人のお弟子の法慶坊の言葉として

〈讀嘆のときなにもおなじやうにきかで、聴聞はかどをきけと申され候ふ。詮あるところをきけとなり〉

と記されています。詮あるところとは、詮じつめたところ、結局のところというところで、肝心かなめな要点ということでありましよう。その肝心な点とは阿弥陀仏の本願（第十八願）のいわれです。そこをよくよく聞きなさいとのご指導です」

*

X「外に大事なことはないですか」

D「念佛聞法に励む場合、自分の日常生活の上に起こってくるさまざまな問題や悩みと聞法とを別にしないことです」

X「どういふことか、もう少し詳しく話してください」

D「たとえ、人から誤解されたり悪口を言われて腹が立った時、そのことと仏法聴聞とを別にしないことです。現実には腹が立った時、仏様が〈煩惱の深い者よ〉と仰せられている煩惱具足の凡夫とは、本当にこの私のことなのだ」と我が身の上に咀嚼することです。あるいは病氣などで不安な気持ちになると、これも

〈いささか所勞（病氣）のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり〉

と『歎異鈔』にあるように、病氣を不安に感じるのも私の煩惱のせいなのだ、いよいよ煩惱の深い自分と知らしていただくのです」

X「日常いろんなことであつて、その中で苦しんだり、怒ったり、ねたんだり、困ったりする、そういう私の心を仏法に照らし、我が身に仏法を引き当てて見る。そういうことが大事なのです」

D「そうなのです。そういう現実の悩み苦しみとは別に仏法を聞くのは仏法の知識が単に増えるだけで、仏法が身に付きにくいですね」

X「お寺に参ってお説教を聞く時だけが仏法で、家に帰ればもう仏法とは無関係になり、あいかかわらず従来の自分の〈思い〉

だけで物事を見たり考えたりすることが多いのです」

D「そう思います。清沢満之師は

〈苦痛は罪惡の結果なり〉といわれ、悩みが起ればそれは自分自身にどこか問題があるからなのだ、と仏教の教えにそつて内省してみることをお勧めになっています」

*

X「外に心得うべきことはありますか」

D「実は非常に大事なことなのですが、名師の中の名師とうたわれた大谷派の香樹院徳龍師が〈これ一つ聞きつけずばおくまいの心がゆるんだら、仏になる種を失ったと思え〉

といわれたことです。とにかく、仏法を聞き開きたい、あるいは仏にいたい、あるいは生死の問題を解決したい、あるいは人生に本当の安心をえたい、あるいはゆるぎない真実を実感したい、あるいは人生に本当に充足したいなど、自分の心底の第一の願いを仏法によって何として解決したいという一途な姿勢、これが非常に大事です。聞法する人は沢山いますが、いつまでたつてもぐるぐる周りで、同じ処に足踏みをし、本当のところ

が分からぬままに終わるのは、この姿勢が乏しいからです。とかくあやふやなところに〈これでよし〉と腰をかけてしまふのです」

X「いわば、助かりたい救われたいの一途な願いを持続しての聞法が大変大事なのです」

D「知つておぼえてうなずいた」だけでは自分自身の心の奥底が満足しないものです。〈これでいいんだ〉と無理に自分に言い聞かせても、心の底からのごまかしようのない欲求がウンといけません。清沢満之師が真実を求め

る宗教心のことを

〈人心の至奥より出ざる至盛の要求〉

といわれましたが、この宗教的欲求が充足するまで聞きぬくことです」

X「今までお聞きしたようなことが信心に導かれるための大切なことなのです」
D「そう思います。ただし、そういうことがなければ信心は起らないというのではくれぐれもないことです。不可思議の弥陀の大悲が一人一人の上にかけていられますから、機縁があれば何の用意も手間も入らず信心は開けると思っています。ただ普通はなかなかそうはいきませんので、私が述べたアドバイスは、こういう点に心を寄せて聞法するならば信心に導かれる大事な縁になるということです」(了)



画像は場合に応じて拡大してクリックしてください

歎異鈔第十三章第六講

願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよおすゆえなり。さればよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそうらえ。『唯信抄』にも、「弥陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくわれがたしとおもうべき」とそうろうぞかし。

(歎異鈔第十三章)

現代語訳(阿弥陀仏の本願をほこり、それに甘えてつくる罪も、過去の世の行いが縁となつてはたらくことによるのです。だから、善い行いも悪い行いもすべて過去の世からの縁にまかせ、ただ本願のたらしきに身をゆだねるからこそ、他力なのであります。『唯信抄』にも、「阿弥陀仏にどれほどの力がおありになると知った上で、自分は罪深い身であるから、とても救われないなどと思うのであろうか」と説き示されています)

歎異鈔十三章の趣旨によつて、宿業と弥陀の本願の關係をお聞かせていただく、と、

〈自分の今の行いは自分で善を行おうと思つても自由に行えないし悪を止めようとしても縁がくれば悪をなしてしまふ。また縁がくれば善もなすし、縁がなければ悪さえもできないのである。まことに宿業因縁で人間は動いている。であれば、

そういう凡夫の行う善によつて仏に救つていただこうというのは、宿業の人間であることを知らないからである。であれば、今の私の行いを何とかして救われようというような我が身知らずなことはさしおいて、こんな宿業的人間をそっくりそのまま「救おう」と立ち上がってくださった阿弥陀如来様の本願に信順し、「助けてやるで、念佛申せ」と仰せ下さる本願に一筋にお任せしていく外はない」このように仰せ下さるのでしよう。

*

「よきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいら」せよ、いわば「己の行いの善も悪も業報のままにおいて本願をたのめ」というこの言葉を師から聞いたある人が、「じやあ悪をやりたいと思つたら自由にやってもいいのですか」と質問したところ、師の曰く「できますか」と。

この「できますか」の一言は重い。

「往生のために千人殺せと言われても、殺すことも出来ない」、いわば善も自由にできないばかりか、悪をせよといわれても自由に出来ない、そういう人間、それが宿業的人間なのです。

であれば、「我が行いをどうしななければならぬ、こうしななければならぬ」と自己制御して生きようとしても、宿業因縁のためにそうはできない。善も悪もその程度の因縁のままより仕方なく、ただ「ひとえに本願をたのむ」こと、そのことこそ救われる道なのだといわれるのです。

*

この第十三章の話は、自分の苦悩を通さずに第三者的な態度で読むと、いささか危ない思想と受け取られますが、自分がどこで救われるかを自分自身の今の現

実に立つて内省して見ると深くうなずけてきます。

*

いつの時代でも倫理は盛んに説かれています。今日では、嘘をつくなどか親に孝行せよとかいう個人倫理よりもむしろ社会倫理が盛んに説かれます。

戦争を無くし平和を実現するために行動せよ、人権を守り差別をなくして平等な人間関係をきづけ、政治的に抑圧されている難民を援助せよ、富の格差を無くし貧困に生きる人たちの生活を護れ、自然環境を破壊するななど、毎日のように聞かされます。どれもとても大事な問題です。

しかしこれらの問題をまじめに背負うていこうとすると、他の人はともかく、自己においては清沢満之師がぶつかつたと同じような壁にぶつからざるをえません。清沢師は『我が信念』に

「言葉を慎まねばならぬ。行いを正しくせねばならぬ。法律を犯してはならぬ。道徳を破りてはならぬ。礼儀に違うてはならぬ。作法を乱してはならぬ。自己に

対する義務、他人に対する義務、家庭における義務、社会における義務、親にたいする義務、君にたいする義務、夫にたいする義務、妻にたいする義務、兄弟にたいする義務、朋友にたいする義務、善人にたいする義務、悪人にたいする義務、長者にたいする義務、幼者にたいする義務、いわゆる人倫道德の教えより出づる所の義務のみにても、之を実行することは決して容易なことでない。もし真面目に之を遂行せんとせば、終に〈不可能〉の嘆きに帰するより外なきことである。私はこの〈不可能〉につき当たりて、非常なる苦しみを致しました」

と述べておられます。これは個人倫理・社会倫理に通じての我が身の〈嘆き〉です。

聖パウロが『ロマ書』に

「我が欲するところの善はなしえず、我が欲せざるとこの悪をばこれをなす。あ我が死せる体を救うものは誰ぞ」と記している嘆きも同じです。

これは特殊な個人の問題ではなくて、人間が己の行為をまじめに問う時にぶつかる問題であり苦悩だと存じます。

こういう苦悩せる人間にとって、「よきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのめ」という思召しは自分の行いだけではなく、自らの人生全体に悩んでいる人にとつて、本当に最後の救いの光ともいふべき大悲の言葉です。

*

なお今日、ややもすると浄土真宗がこうした社会倫理を実践するための思想ないしは行動原理として受け取られるふしがあります。

浄土真宗に帰依することによつて、あるいは浄土真宗に帰依した者ならば、社会的正義に生き、平和や人権や環境などの社会問題を行動的に取り組む人であるはずであり、あらねばならない、と。

こうしたことは、今日の人間と宗教における重要な課題であることはいまでもありません。

ただそれを問題とする自己一身の現実に戻る時、宿業に縛られて、いつまでもたつてもあいつも変わらぬ私、どう自分に言い聞かせてみても私は私でしかありえない私、すぐれた人のマネなどできぬ私が残ってしまいます。

*

清沢満之師はこの苦悩の身を抱えて、そこに如来の救済を仰がれました。曰く「無限大悲の如来は、如何にして、私に此の平安を得しめたまふか。外ではない、一切の責任を引き受けて下さるることによりて、私を救済したまふことである」と。

人間の行動原理を求め、その思想的根拠として真宗が求められてきたのではなく、むしろ自己行動(宗教行・倫理など)の破綻のあげくに求められ、帰依されてきたのが浄土真宗ではなかったでしょう。

いまこの「さればよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそうらえ」

の仰せも人間のこうした苦悩において聞かれてこそ、まことに有り難くいただける御言葉だと思えます。

*

〈己の善悪からいったん手を離して弥陀をたのめ〉というこの歎異鈔のお言葉は、一見すると倫理を無視し、倫理を捨ててかえりみないようですが、実はそうではありません。清沢満之師が日記の『臙扇記』に

「自力の修善を勤むべし(之を勤めざるは人間にあらざる也)。しかれども之を勤めんとするにあたわざる也。如かず自力を捨てて他力に帰し、その信仰の結果として、自ら避悪就善をなし得らるるを期せんには」

と記しておられます。この意は

〈修善に励むのは人間として当然のことである。しかし自分の努力で修善を行おうとしても出来ない。しかれば他力に帰して本願に一切お任せをする。その上で、

その信心のおのずからなるもよおしによつて悪を避け善におもむく、それを期待するほかになく、期待していいのである〉と。

これはすなわち、自我(私)のはからいや努力でもつては、まことの善をなすことは不可能である。こうした自身においてはず本願他力に帰すほかはない。しかしひとたび弥陀を憑むなら、憑む人を通して弥陀の善き功德が帰した者の上に表れ、悪を避け善に心がけようとする意欲がおのずとわいてくる。そこにこそ新たな本来の倫理が回復してくる、そういわれるのでありましょう。

*

では「本願をたのむ」とはどういうことでしょうか。弥陀の本願は、人の行いの善し悪しを問わず、煩惱具足の宿業的人間と知らしめて、「ただ念仏してこい、必ず助ける」と御約束下さる大悲の願言です。古人の歌に

「たのめとは たすかる縁の なき身ぞと 教えて救う 弥陀の喚び声」とあります。

この弥陀の本願にお任せして「ただ念仏して弥陀に助けられ」るばかりであります。これをここでは「他力にてはそうらえ」と仰せられるのです。

「我が名を称えよ」の仰せに順って念仏することが、弥陀にお任せしていることなのです。更にいえば「我が名を称えよ」の仰せを聞く、聞くことが弥陀を憑んでいられることの実際です。

*

さて次に『唯信抄』の言葉が引用されています。この唯信抄は聖覚法印の著です。聖覚は法然聖人の教えを信奉し、法然教学の理解者として活躍しました。親

鸞聖人より六才年上です。聖人は聖覚を法然門下の兄弟子とし、また師法然聖人の教えを正しく理解された人として大変尊敬されました。この唯信抄を聖人は何度も書写されてご門弟に送り、よく読むことを勧めておられます。また唯信抄の註釈(『唯信抄文意』)もされています。このように親鸞聖人のご門弟にも大変影響をあたえたのが唯信抄で、歎異鈔にも唯信抄の内容が色濃く反映しています。唯信抄は、法然聖人の主著である『選択集』をやさしく説いたもので、念仏往生の法門が分かりやすく説かれています。ことに念仏往生の本願が起されたわけが詳しく説かれていて、親鸞聖人は弥陀の本願がどういうものであるかをご門弟に知らしめるためにこの書を何度も写して送られました。

なお、聖覚法印は父澄憲のはじめた安居院流という唱導の大家としても当時有名な方でした。唱導とは經典などの趣旨を喩や物語で抑揚を付けながら巧みにかたる「語り」のことです。

*

「唯信抄にも、弥陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すぐわれがたしとおもうべき」

〈仏の願ふかしというとも、いかでかこのみをむかえたまわん〉と。このおもいまことにかしこきにいたり。慢をおこさず高貢のころなし。しかはあれども、仏の不思議力をうたがうとがあり。仏いかにばかりのちからましますとしりてか、罪業のみなればすぐわれがたしとおもうべき〉

とあって、〈仏の本願は深いといっても、どうして私のような罪業の重い者が救わ

れようかと疑う人に対して、それは謙虚のようではあるけれども本願が不思議であることを知らずに疑っているのである。仏の本願力がどれほどのお力であるかを本当に分かつて、罪業の身であるから救われ難いというのであろうか。それは本願が広大な不思議力であることを本当は知らないから疑っているのである〉と。

こういうことを唯信抄のこの文は教えておられ、これを唯円房は歎異鈔に引用されたのです。

すなわち「弥陀の本願が不思議だからといって悪をおそれないのは往生しない」などという人は、弥陀の本願が「老少善悪をまったく選ばない」というその不思議な力のほどがどれほど広大なものかを知らないいいぐさである、と唯円房は異義を正しておられるのです。(了)

〈住職つれづれ雑感〉

*六月三日から七日まで福井別院へ。別院は改装工事が完了し、かなり美しく便利になっていた。

またお朝事の参詣が少し増えていた。御逮夜の法話後、市内の城跡に初めて行ってみた。近くに護国神社があり、境内に福井藩の藩政改革で功績をあげた人たち(松平春岳、中根雪江・橋本左内・横井小楠など)を讃える絵と詞があった。

*六月十七日・十八日は本山同朋会館へ。名古屋近郊からの奉仕団を担当。東本願寺大師堂の屋根裏(小屋組み)を見学。中は巨木が張り巡らされていて、世界最大級の建築物ならではの壮観であったし、これが大谷派門徒の汗の結晶であると思ひ、厳粛な気持ちになった。

*二階の部屋は自動車や電車の音がうるさいので二重窓にした。インターネット上の店に窓の寸法を測ってサッシを注文し、送ってもらった。取り付けるのに少し手間がかかったが完了。騒音が半

減以下になり、ずいぶん静かになった。